

## タカロア島の遺跡とその諸問題

新田栄治\*

### Archaeological Sites on Takaroa Atoll, Western Tuamotus and Their Problems

Eiji NITTA\*

There are many sites on Takaroa Atoll, Western Tuamotus, French Polynesia. There are *marae*, *maite* (taro cultivation ditches), habitation sites, and fishhook ateliers. The author undertook the archaeological survey from July 2 to 17, 1980. This investigation is made fifty years after K. P. Emory's first survey on Takaroa.

The study focused on *marae* and *maite*. The *marae* on Takaroa can be classified into three types.

- (1) Composed of a main platform surrounded by small ones, and a chair in the court.
- (2) Composed of a main platform surrounded by small ones, boxes and uprights, and a chair in the court.
- (3) Enclosed by the low stone walls or low platforms.

Although the construction of *marae* on Takaroa resembles that of Emory's inland type in the Society Islands and one of the Western Tuamotu types, it is peculiar to Takaroa and are not seen on any islands in Polynesia. Someone says that there can be found the resemblance between the *marae* on Takaroa and those of Necker Island, but it is not able to determine the interrelation between these two isolated islands.

The *maite*, which are common on the atolls in Polynesia, are widely distributed on almost the whole of Takaroa. This leads us to the hypothesis that the people were depended on cultivated taro as well as marine resources.

タカロア Takaroa は西ツアモツ群島に浮ぶ環礁である。南に約 10 km 離れた同じく環礁のタカポト Takapoto と対になって扱われることが多い。タカロアは南緯 14°27', 西経 144°58' で南半球の熱帯にある。1616年4月14日, オランダ人, ヤコブ・ルメルール Jacob Le Maire とウィリアム・コルネリソン・ショウテン William Cornelison Schouten がヨーロッパ人として初めて来航し, タカロア, タカポト 2 島を一つの島として誤認して, 「土地なし島」 "Isle without Ground" と命名した。1765年にはイギリスのジョン・バイロン John Byron

\* 鹿児島大学教養部考古学研究室

Department of Archaeology, College of Liberal Arts, Kagoshima University, Korimoto 1-chome, Kagoshima 890, JAPAN

が来航し、両島を「キング・ジョージ島」「King Georges Islands」と名づけた。現在はフランス海外領土として、フランス領ポリネシア、ツアモツ・ガンビエ行政区に属する。タカロア、タカポト両島間の往来はきわめて親密で、婚姻関係もあり、ひとつの島社会を形成しているかのようである。現在の他島との交流はタヒチからのスクーターが2週間に1度くらいコプラの買付と生活物資運搬に来航するのが主であるが、島民は船外エンジン付ベニヤ板製モーターボートでアパタキ Apataki あたりまで気軽に往来する。またタカポトにはタヒチから週1便の定期航空路があるため、タヒチとの往来はかなり頻繁である。

## 2 タカロアの自然環境

タカロアは北東-南西に長軸が伸びた、長さ約22.3 km、幅約6.1 kmの環礁である。島の南西部に幅広で深いパスがあり、礁湖は外洋に完全に開口している。このパスのために礁湖内には外洋に棲息する魚類も容易に出入りすることができる。また、大形船舶の停泊が可能であり、ツアモツの一般の環礁よりも恵まれた居住環境にある。現在の村落はこのパスのある北側の平坦な小島にある。

北西側と南西部に大形の島が浅いパスで隔てられて連なり、南東側に小形の島々が点々と連なって、ひとつの環礁を形成している。島内は全島がココヤシ・プランテーションとされ

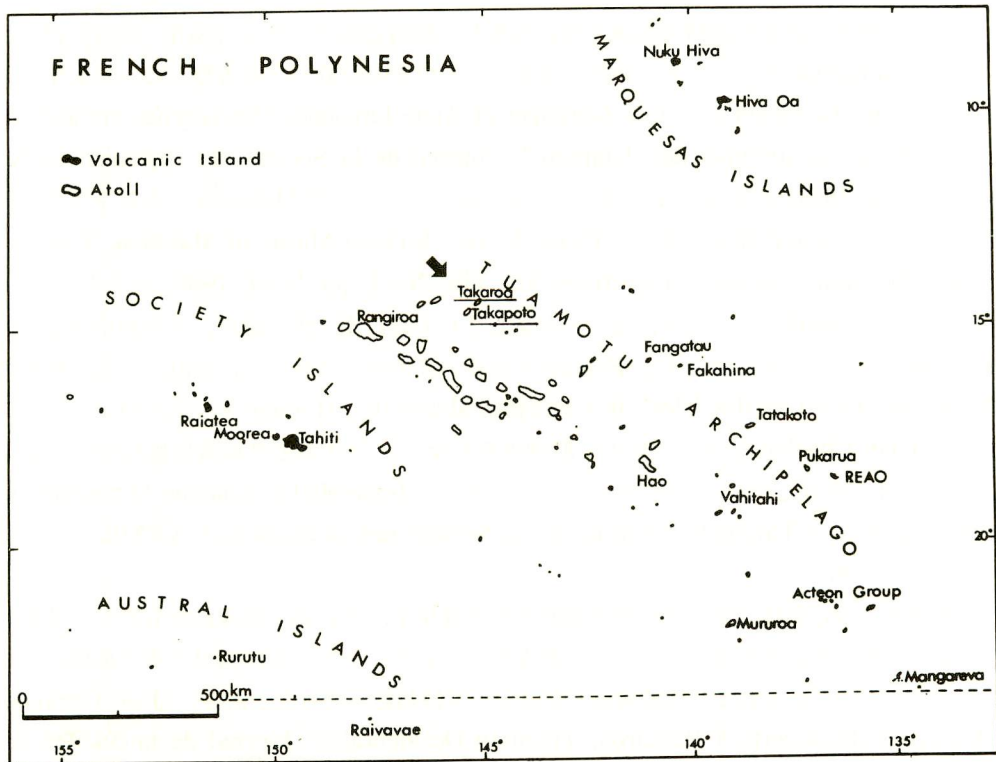


Fig. 1 French Polynesia and Takaroa Atoll

ているが、植生の密度は濃くなく、またタカポトなどのようにヤシの下草を焼き払うこともされていないため、ブッシュが密生したままであり、環礁特有の植生が多くみられる。したがって、遺跡の発見・踏査、実測等には多くの困難があった。

### 3 タカロアとその周辺島嶼の従来調査研究

タカロアおよび周辺の西ツアモツ群島の諸島嶼における考古学的調査はきわめて限られている。1929-30年、ツアモツ群島全域をヨットに乗って周航してマラエを主とする石造建築址の一般調査を行ない、また民俗資料の調査・記録を行なって大きな業績を残した、ハワイ・ピショップ博物館のエモリー Kenneth P. Emory の足跡がもっとも大きい。タカロア、タカポトの遺跡についても、一連の著作のなかで触れられている。マラエの集大成を行ない、以後のマラエ研究の基礎となった“Tuamotuan Stone Structures” (B. P. Bishop Museum Bulletin, No. 118, 1934); マラエ研究の進展後の新しい考えを示した“A Re-examination of East Polynesian Marae: Many Marae Later” (R. C. Green and Marion Kelly eds. “Studies in Oceanic Culture History” Vol. 1, Pacific Anthropological Records, No. 11, pp. 73-92, 1970); マラエの祭祀とポリネシア人の宗教信仰についての研究“Tuamotuan Religious Structures and Ceremonies” (B. P. Bishop Museum Bulletin, No. 191, 1947); ツアモツの民俗資料、物質文化、生活様式を集成した“Material Culture of the Tuamotu Archipelago” (Pacific Anthropological Records, No. 22, 1975) などがある。

マラエの研究が従来諸研究の多くを占めるが、個別島嶼のマラエの調査・研究には、ランギロア Rangiroa でのマラエの発掘と復原、およびその位置づけを考察したパリ大学のガランジェ José Garanger らの José Garanger et Anne Lavondés “Recherches archéologiques à Rangiroa, archipel des Tuamotu” (Journal de la Société des Océanistes, t. XX II, pp. 25-65, 1966) がある。またエモリーが記録したマカテア Makatea にあるマラエの再発見と4つの人頭骨の発見を報じた Pierre Verrin “Ra’iupu Marae of Makatea, Tuamotu Islands, Oceania” (Asian Perspectives, Vol. VIII, No. 1, pp. 212-4, 1966) がある。

マラエ以外の遺跡については、ほとんど調査されておらず、居住遺跡、タロ栽培址などの重要な遺跡については、ほとんど空白状態である。タカポトにおいて、当時、タヒチ博物館 (Musée de Tahiti et des Îles) 現人類博物館 Musée de l’Homme (パリ) のシャジーヌ Jean-Michel Chazine がほぼ全島の一般調査を行ない、マラエとタロ栽培址について報告し、略測図を掲載しているのがあるくらいである。Jean-Michel Chazine “Prospections archéologiques à Takapoto” (Journal de la Société des Océanistes, t. XXXIII, n. 56-57, pp. 191-215, 1977).

遺物研究については、ポリネシアの物質文化の性格上、きわめて限られたものしか遺存していないため、釣針の形態の研究が広く行なわれており、そのうち、西ツアモツ地域のものについて、ガランジェおよび篠遠喜彦 (ピショップ博物館) の研究がある。(José Garanger “Hameçons découverts à Rangiroa, Tuamotu Occidentales” (Journal de la Société des Océanistes, t. XXI, pp. 142-5, 1965); Yoshihiko Sinoto et M. Kellum “Hameçons récoltés aux Tuamotu Occidentales” (Journal de la Société des Océanistes, t. XXI, pp. 145-9,

1965) また、篠遠には東ツアモツへの途次に立寄った西ツアモツの島での採集品について簡単に報告した“Portable Artifacts collected from Tuamotu Atolls in 1976”(The University of Kanazawa Polynesian Scientific Expedition “A Study of the Polynesian Migration to the Eastern Tuamotus-Preliminary Report-” pp.173-9, 1978 Kanazawa) がある。

以上のように考古学上の調査はいまだに例が少なく、西ツアモツの先史時代は不明なところが多く、ソサエティ、マルケサス両諸島での考古学上の調査・研究の成果に比較して大きく立遅れているのが現状である。

タカロア自体については、1929-30年のエモリーの短期間の一般調査があるにすぎず、以来50年間にわたり調査の手は入らなかった。したがって、私の調査は50年ぶり、2度目の調査であり、エモリーの調査後の遺跡の変化と現状を検証するうえでも重要なものであった。

ツアモツ群島の考古学調査が立遅れている原因は大きく3つあると考えられる。①交通の不便。現在定期航空路があるのは西ツアモツを主とした僅かの島に限られ、主にコプラ買付のスクナーに乗船するしかない。西ツアモツで2週間に1便、東ツアモツでは2か月に1便くらいしかなく、各島に立寄るため、目的地までえらく時間がかかる。②居住条件の悪さ。ツアモツ群島はほとんどが環礁であり、水と食料の確保が問題となる。③政治的要因。仏領ポリネシアに属しているツアモツ群島は東半部が軍の管理区域となっているため外国人の立入は制限がある。これはムルロワ環礁での核実験のためである。このような阻害要因があるため、調査には特別の困難が伴うし、近い将来にも解消される見通しは暗いようである。現状ではタヒチ島パペーテにある O. R. S. T. O. M. (Office de la Recherche Scientifique et Technique Outre-Mer) のパペーテ事務所およびタヒチ博物館(Musée de Tahiti et des Îles) に所属する研究者の役割が大きいのはやむをえないところである。

#### 4 タカロアの遺跡と調査

エモリーはタカロアにあるマラエのうち18基について略述し、その位置を地図上に示している。また、8基について略測図を掲載している (Emory 1934, pp.30-35)。

1980年7月2日から17日までの期間に行なった私の調査では、5基のマラエを踏査・記録し、タロ栽培址3か所、井戸址1か所、釣針製作の未成品、破損品の散布地2か所、居住遺跡1か所、炉址1か所を発見した。時間的余裕がなかったため、実測・試掘できたのはこれらのうちの一部分である。

踏査した区域は村のあるモツから北へ約5 km までの地域であり、Marere Vahine 区の範囲であったが、Apae Aroa 区から Tuarue 区まではモーターボートによって海上から点状に上陸して踏査した。

#### [マラエ]

##### (1) マティティマルマル Matitimarumaru (M 1)

エモリーの Site 4 である。エモリーによる略測図 (Emory 1934, Fig. 15) があるが、実際には大きな誤りが多い<sup>1)</sup>。今回、実測を行ない、写真撮影を行なった (Fig. 3, Pl. 2)。

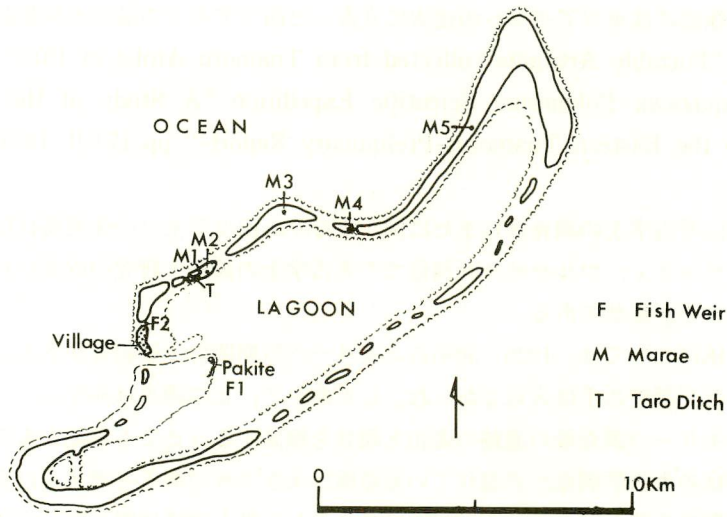


Fig. 2 Location of Surveyed Sites on Takarao

ココナツプランテーションからはずれた、パンダナス *Pandanus* やモンパノキ *Messerschmidia argenta*, シダ類などが密生した深いブッシュに覆われており、全容を明らかにするには、広範囲に伐採・清掃しなければならなかった。

マラエ構築物は礁湖岸より約 60 m 内陸部にあり、前面は礁湖に向いている。主アフは長 6.20 m, 幅 1.45 m, 現高 0.60 m の長方形基壇で、前面に 3 基のボックスを付置する。アフの構造は、まず長方形の珊瑚板石（スラブ）を立てて平面長方形の箱状の囲みを作る。スラブの下部は地中に埋没させる。この長方形の囲みの内部には珊瑚の塊、礫をつめていく。このようにして作った土台の上に、スラブを横積みにして積み上げ、直方体の壇形にするのである。アフの上面にはスラブが置かれており、土台内部の礫は外部からは通常は見えないので、スラブを積上げて構築したような外観を呈する。主アフ上の立石については現状では残っておらず、不明。主アフ両側にはスラブが敷かれている。3 基のボックス内部には遺物等は皆無であった。

主アフの前方、約 5 m 南に小アフが 1 基あった。エモリーの図では、このアフが大きく東へずれているが、真中線上に位置する。横造は主アフと同様、長 2.80 m, 幅 1.10 m, 現高 20 cm である。

コートには他には何らの施設もない。

以上の 1 対のアフを中心としてこのマラエは構成されているが、その東側に、2 基の石囲い（立石をもつ）と 1 基の小形アフが付設されている。

C は北辺長 1.6 m, 両辺現長 1.0 m であるが、スラブで北辺、西辺を囲む。東・南辺はスラブが現存しない。北よりに立石があるが、南側に倒れかかっている。囲いの内部にはスラブ、礫が散乱する。D は北辺長 1.8 m, 東辺長 2.4 m で、スラブが立てられているが、西・南辺には石列がない。立石は北辺沿いに 2, 西側に 1 がある。内部には何もない。E は長 4.0 m, 幅は西辺で 1.2 m, 東辺で 1 m であるが、スラブを立てて長方形の囲みを作り、その内

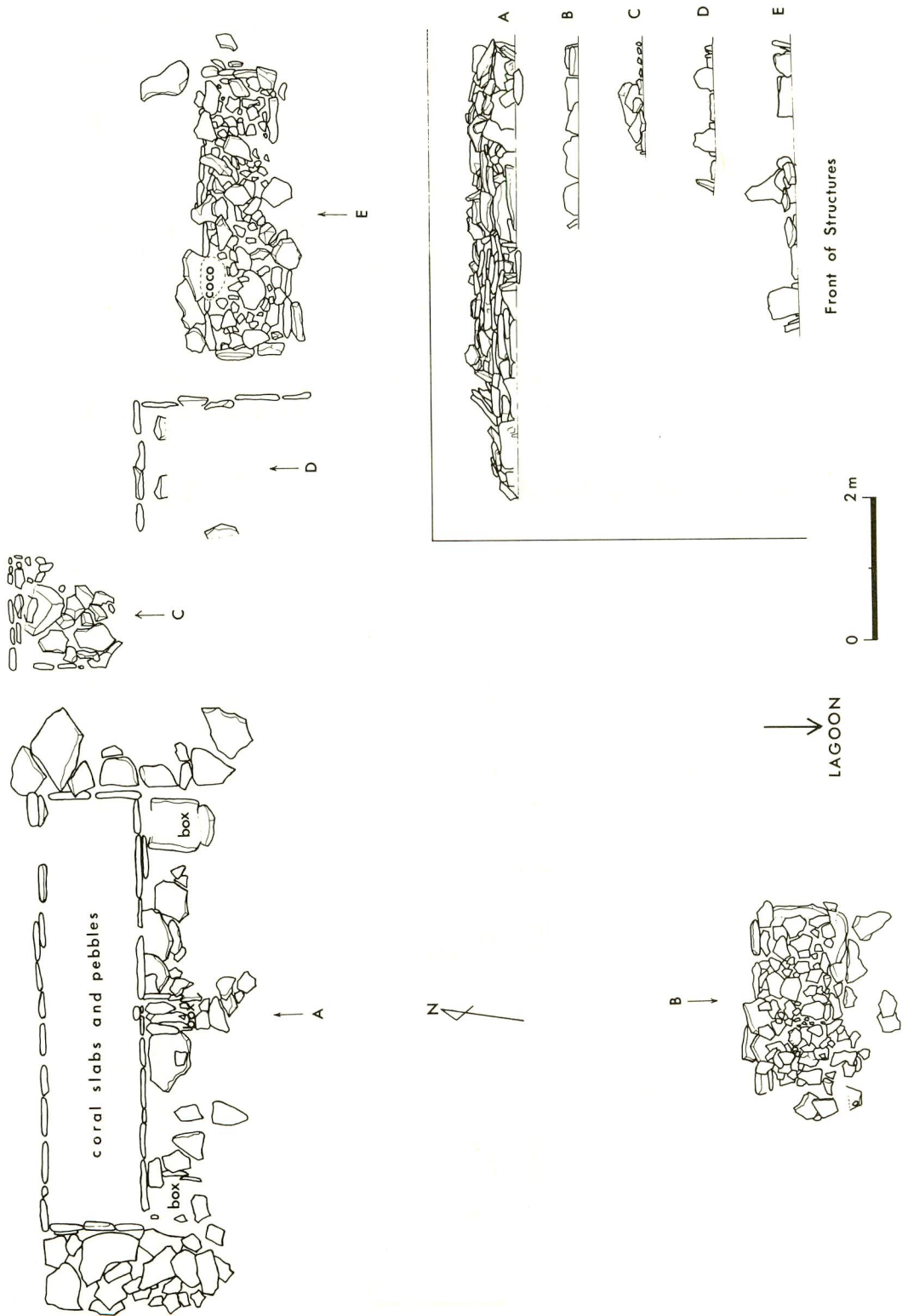


Fig. 3 Marae Matitimarumaru

部に礫をつめて、スラブを乱雑に積重ねている。北辺沿い中央と左端に立石2が残るが、右端部に大形スラブが倒れているので、本来は3基あったと考えられる。南辺左前部に立石1がある。

遺物はなかったが、主アフ背後の地表より、大形巻貝 (*pahua*) が採集された。胴部に1穴が穿孔されている<sup>2)</sup>。

(2) ランギハオア Ragihaoa (M2) (Fig. 4 PL. 16)

マティティマルマルにあるが、(1)の北東数十mのところに位置する。エモリーの site 3 である。(1)と同様に深いブッシュで覆われていた。10m 四方にわたって伐採・清掃して、構造物の全体を露わした。主アフ、円形構築物、コート内の椅子状アフから成るコンプレクスである。

主アフは前面に1段があり、階段状となっている。全長5.30m、主アフ幅2.00m、段部幅1.30m、主アフ高0.80m、段部高約0.25mである。主アフ後面は整えられておらず、崩壊

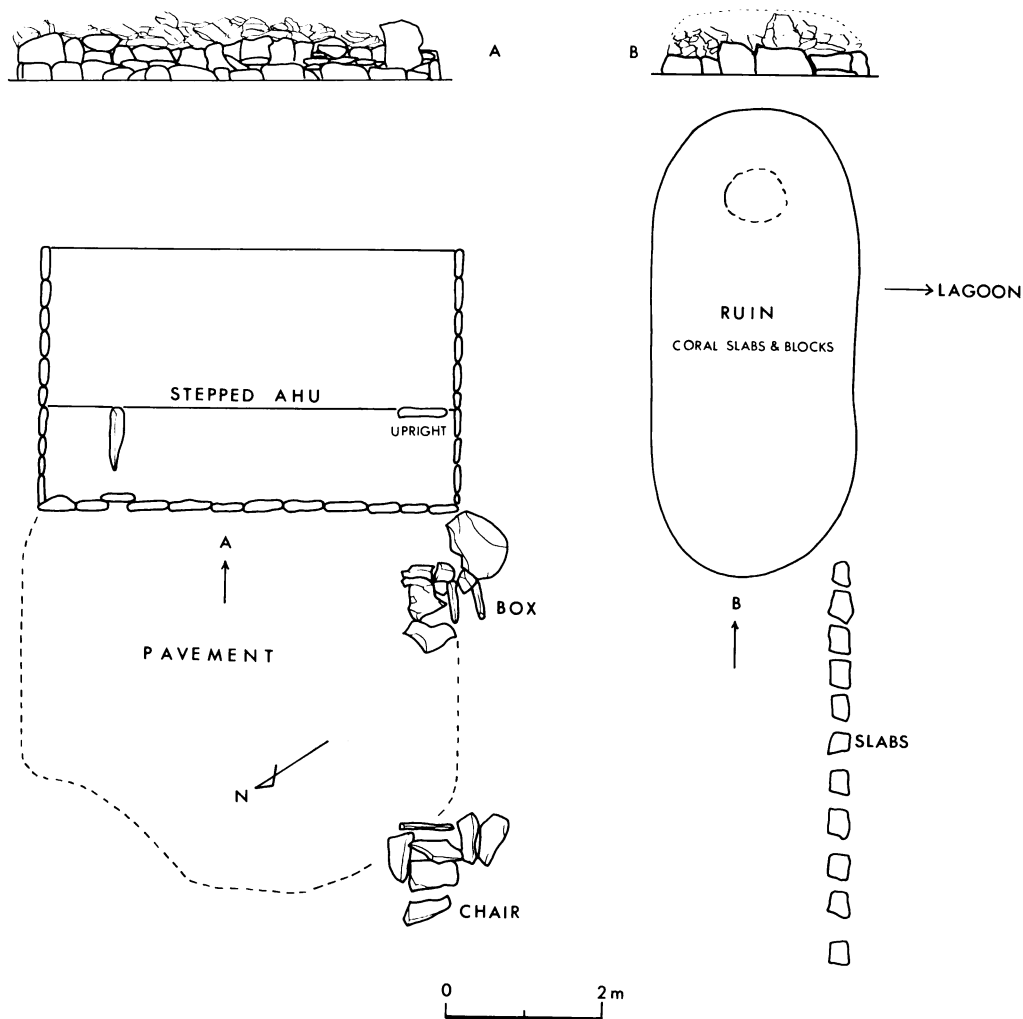


Fig. 4 Marae Ragihaoa

が著しいが、前面と側面はスラブを立てて囲み、内部に珊瑚の礫をつめて、その上にスラブを平積して壇を構築している。前部段上、右端に高約75cmの立石1基が残存する。主アフは礁湖岸より30mくらいのところに、礁湖岸と平行に外洋に向いて立地する。主アフ右前部に立石をもったボックス1基が、このボックスと対応してコート内に、アフから3.9mのところ立石をもつ椅子状ボックス1基が相對している。コートは主アフの幅と、前方約8.5mの範囲にわたって、舗石状にスラブを敷きつめて整えている。以上のように、きれいに整えられたマラエである。主アフ前面のボックス内部を発掘したが、遺物等は皆無であった。

上記のマラエのアフ右端から約2.4mのところ現状ではほぼ完全に崩壊した構築物がある。平面はほぼ南北に長い楕円形5.8×2.6mを呈した珊瑚塊とスラブを積上げたものである。前部はマラエと同様にスラブを立てて弧状に囲み、その上にスラブを平積してアフ状にしている。後部には、基台を珊瑚ブロックで円形に作り、その上にスラブを平積して、ドーム状に構築していたかと思える楕円形構築物がある。現在は崩れていて、内側に落ちこみ、中央部が凹部となっている。きわめて特異な構造をしている。内部からは何も発見されなかった。

コート右端を画するためか、構築物右側辺の延長上に珊瑚スラブが一行に敷かれていた。コート内を清掃したところ、地表面に、人間の破碎した頭骨、下顎骨、長管骨、歯、ブタの下顎骨、シンジュガイ製の大型釣針1点、釣針製作に伴う針内部片などが散乱しているのが発見された。これらの人骨類は火にあっておらず、生の状態であった。

コート内に2×2mの試掘坑(TP-1)と境界線(?)のスラブ列の外に1×1mの試掘坑(TP-2)を設けて、コート内での遺構、遺物の検出またコート内外での差をみるため発掘した。TP-1の土層堆積は表層の褐色土層の下から灰褐色土層が、さらに下に、枝状の珊瑚を主とする珊瑚礫が堆積する。地表下50cmまで掘って発掘を止めた。地表下10~15cmまでの範囲から、120個を越える人間の歯、頭骨破片若干、肋骨少数が出土したが、人工遺物はなかった。地表下20cmより深くなると、出土物は皆無であった。これらの人歯・骨は埋められた形跡はないので、地表に散乱していたものであろう。

コート外のTP-2は土層状態はTP-1と同じである。少数の人間の歯と釣針製作時の廃棄物である内部片(シンジュガイ製)が出土した。

以上のマラエの周囲、特に前方に、確認できたものだけで9基の箱式石棺墓状の遺構がある。いずれも珊瑚スラブで長2mならず、幅数十cmの長方形の箱を作り、一方の短辺に立石をたてているが、蓋石はない。これらのうちの1基を発掘した。(Fig. 5)。立石は北側にあり、主軸はほぼ南北に向いている。立石と反対側の小口部にはスラブはない。両側辺はスラブで囲む。坑底は不明確であるが、側辺のスラブが地表下20cmまで埋まっているので、坑底は現地地表下20cmくらいのところであろう。内部からは少数の人骨細片と歯のほかには、ウミガメ骨細片、魚骨、シンジュガイ破片が検出されたのみで、まとまった骨格はなかった。墓坑と断定できるものはない<sup>3)</sup>。

この地はタカロア全島の会合・祭祀の場といわれていた(Emory 1934, p. 30)。



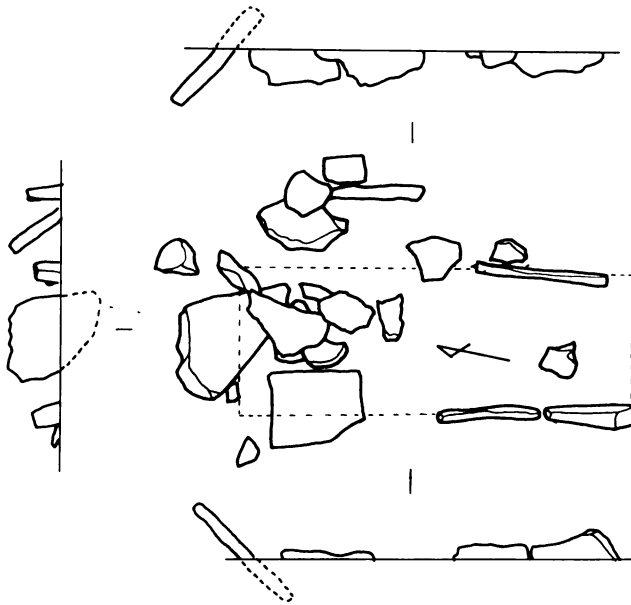
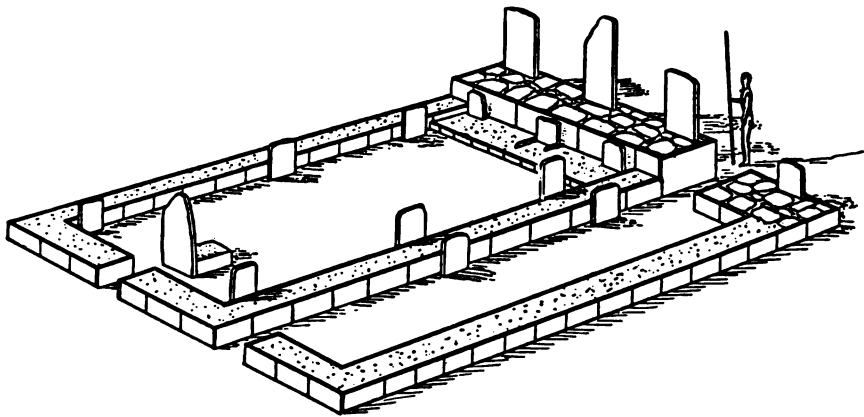


Fig. 5 Cist at Ragihaoa (1/60)

Fig. 6 Marae Mahina-i-te-ata when Emory visited 1930.  
(After Emory's sketch)

## (3) マヒナ・イ・テ・アタ Mahina-i-te-ate (M3) (Fig. 6 PL. 3)

エモリーの復原図によってよく知られたマラエである。オマヘラ Omahera にある特徴的な整った大形のマラエであるが、エモリーの踏査時には主アフの立石 2 を除いて、ほぼ完存していたようであるが (Emory 1934, p. 30), 今では主アフ左側に径 3 m, 深 2 m くらいの盗掘坑が掘られているほか、マラエ左半分が盗掘により、徹底的に破壊されている。インフォーマントによれば、ここに宝物が埋まっているとのうわさが広まったためであった。主軸はほぼ南北で、前面は礁湖を向く。主アフは前面に一段あり、現在右端の立石 1 基が立って

いるが、中央・左端の2基の立石は倒れていた。主アフに接続して、スラブを両側に立てて、内部に礫をつめたウォールが伸び、コートを長方形に囲む。主アフに相対するウォールの部分は、側辺のウォールよりも高く作られ、小アフ状を呈している。これらの東側に約30cm離れてコの字形の小アフとウォールが付属している。構造は同様である。北端の小アフは上面をスラブで覆い、立石1基が現存する。南端部はウォールより高く、スラブで上面を覆う。これらのさらに東方外側に高50cmの立石をもった椅子状のボックス1基が新たに発見された。

盗掘によって破壊された西側部分を除いて保存状態は良好であったが、低い灌木で全体が覆いつくされていた。礁湖岸から約200mくらい内陸部の平坦な砂地に築かれたマラエである。

#### (4) マタティポキ Matatipoki (M4) (PL. 4a)

エモリーの Site 7 (Emory 1934, p. 31, Fig. 17) である。両側を浅いパスで囲まれた低いモツの上に立地する。礁湖に近い。エモリー調査時にはすでに破壊されていたが、1980年の調査時には、最下段のスラブのみで、ほとんど痕跡的に残っているのみであった。

#### (5) タエアロヒア Taearohia (M5) (PL. 4b)

エモリーの Site 11 (Emory 1934, p. 31, Fig. 19) である。1906年のハリケーンによって破壊された。礁湖の岸辺に(岸より約5m) 2.0×0.9mのスラブ列が痕跡的に残っているだけである。礁湖からの浸食とココヤシのための開地によって、ほぼ完全に破壊されている。

### 〔タロ栽培址〕

マレレ・ヴァヒネ地区のマラエ1と2とがある島で3か所を発見した。エモリーの調査では全く言及されておらず、タカロアのタロ栽培址(タヒチ語でマイテ maite, 以下この語を使う)の調査としては、今回が初めてのものである。調査期間の制約のため、マティティマルマルのマラエから約100m南西にあるマイテの一部を略測しただけである。

礁湖岸から約100m内陸部の平坦地に、厚いブッシュに覆われて約100×30mの範囲に存在する。基本的には平面形は長方形であるが、鍵手状に曲った平面形を呈するものもある。現状では幅5m、長10m、深1.5mくらいのものから、さらに大規模なものまである。いずれも、この地域の砂質土壌を地下淡水層まで掘り下げたものである。このマイテで注意されるのは、マイテの補強構築である。すなわち、マイテ壁面(長辺側のみ。短辺側は除く。)の上部に珊瑚を直方体に加工した割石を用いて貼石をしており、またマイテ外方のより高い地の傾斜面は段を作り出して地すべりを防護し、さらに段斜面にはマイテ壁面と同様に珊瑚の貼石を施している。

マイテ群の北東隅には珊瑚塊で一辺約4mの方形に枠を作った井戸が築かれている。また、西方にはマイテの外方に珊瑚塊を一辺約2m四方に積みあげたアフ状の方形の石組があった。

マイテ群に入りこんだ、これらの井戸と方形壇がどのような役割をもつものであったのかは確言できない。

## 〔その他の遺跡〕

マレレ・ヴァヒネ地区の上記マラエのある同じ島で以下の遺跡を発見した。

### (1) 調理場址

マラエ・マティティマルマルの南約35mの地点に大きな緩やかな窪地があり、炭化物が散布していた。この中心に1×1mの試掘坑を設けて試掘した。炭化物を含む黒色土層が約1m堆積していた。人工遺物は皆無であったが、人骨・歯のほか、ウミガメ骨、魚骨等の食料残滓が多量に検出された。かなり広範囲に炭化物が広がるのでこのあたり一帯が調理場であり、会食の場であつたらしい。マラエと近接しているので、あるいはマラエの儀礼と関係ある遺構かと考えられる。また、伝説によれば、アリキ（首長）の兄弟がウミガメの頭を争って互いに譲らず殺しあいとなり、一方のタンギヒアアリキ Tagihiaariki が殺されて、ここで調理して食べられてしまったということである。人骨の出土もあり、興味深い遺跡である。

### (2) 井戸址

マレレ・ヴァヒネ地区の南部、礁湖よりにある。厚いブッシュの中で発見した。3×3mのほぼ正方形で、珊瑚塊を並べて枠組を作っている。珊瑚の砂層中に掘りこんでいるが、現状では約1mの深さで埋もれている。井戸枠の構造はマイテ群中にある井戸と同じである。

### (3) 釣針製作址

タカロアでは大形のシンジュガイを釣針の原料とする。釣針の軸部の破損品、未製品（外周部は研磨成形しているが、内部刮抜がまだのもの）、釣針製作時のクズ（内部の刮抜部分、チップなど）、シンジュガイなどの表面採集が3地点でできた。うち1地点はパスに面した場所で、しかも現海面よりも約1m下にある炭化物層中であつた。潜水して発見確認した。

いずれも礁湖に近い平坦地にある。未製品と製作過程で生じるクズが散布していることから、釣針の製作を行なっていた場所であると考えられる。

### (4) 魚のワナ

ツアモツ群島に広く分布する礁湖内に設置された珊瑚礫を並べて作ったワナを2ヵ所で確認した。

村のある島の南側の深いパスの礁湖側に大形のワナが設置されている（PL. 1a）。エモリーの記録にあるパキテ Pakite のワナ（Emory 1934, p. 24, Fig. 9）である。エモリーの調査時には小形のワナ5と大形のワナ1の組合せであつたが、現状では破壊がすすんでいる。インフォーマントによれば、ワナにかかった魚は誰が獲ってもよいとのことである。

他の一つは村のある島の北方の浅いパスに直径約5mで珊瑚塊を円形にめぐらしたものである。破壊されているものと思われるが、高さも低く、干潮時に内側にとじこめられた魚を獲る石干見の類型である。

いずれも潮流によって外洋から礁湖に入って来る魚類の通路に設けられており、たくみに自然条件を利用したものである。

## 5 タカロアの遺跡をめぐる諸問題

タカロアでの調査成果から多くの問題が指摘できるが、ここではマラエとマイテを中心と

して論じたい。

タカロアのマラエには多くのヴァリエーションがあるが、形式的にみると次の3種に分類できる。

- 1 類 基本的に主アフとそれに対応するコート内の椅子，小アフから構成されたもの。  
例：ランギハオア，パエネ Paene (Emory 1934, Site 15)，カイエティニ Kaieteni (Emory 1934, Site 18) など。
- 2 類 主アフとコート内の椅子，小アフに多くの小アフ，ボックス，立石が付属するもの。  
例：マティティマルマル，タエアロヒアなど。
- 3 類 ウォールが四周を長方形に取囲むもの。例：マヒナ・イ・テ・アタ，トゥアンギアンギ Tuagiagi (Emory 1934, Site 9) など。

今回，私が調査したマラエは，上記の3種に分類される。これら3種類のマラエ，つまりタカロアのマラエに共通する特徴は，アフの構築法にある。アフはまず基部に珊瑚スラブを地面に下部を埋めて立てることにより長方形の囲みを作り，その内部に礫，ブロックを入れて方形壇を作る。この壇の側面上に珊瑚スラブを平積みにして積上げ，内部の空間には礫，ブロックを充填して直方体を作る。さらに上面には珊瑚スラブを敷き，外観では礫，ブロックは隠され，全体が珊瑚スラブで構築されているように見える。

このような特徴のあるタカロアのアフに対して，隣接するタカポトでは，珊瑚スラブを立てて長方形の囲みを作り，内部に礫，ブロックをつめただけの低いアフに特徴がある。タカロアのアフの上半部分を取除いた構造といえる。また，東ツアモツのレアオでは，ほとんどのアフがタカロアのアフの上面の珊瑚スラブを除いて，内部の礫，ブロックが上面に露出する（上面の礫は細かく，整えられてはいるが）構造をもつものである。エモリーによるツアモツ群島のマラエ調査によれば西ツアモツではタカポト型の，スラブで箱を作り，内部に礫をつめた構造のアフであって，タカロアの例は西ツアモツでは異例である。中・東部ツアモツでも同様であり，タカロア型のアフ構造はほとんどみられない。エモリーのソサエティ諸島の内陸タイプに類似し，西ツアモツ・タイプのマラエの一類型ではあるもののタカロア独自の特徴を示す構造である。

ツアモツのマラエとの類似点をもつマラエが分布する島として，ハワイから約500km北西にある孤島，ネッカー島がある。この島もエモリーによって調査された (Emory, 1928)。ネッカー島の典型的なマラエの特徴としては床貼りしてある長方形のコートに面して長方形のアフがあり，その上部に多くの立石が並ぶ。またコート内にはアフの前面に1対の立石があり，それと相対する位置に1対の立石があるほか，1基の立石が立てられている (Fig. 7 参照)。エモリーの指摘のようにツアモツのマラエとは一見類似したところがある。しかし詳細に検討すれば異なる点も多くみうけられる。一見類似するかと思えるタカロアのマラエ第1類と比較してもその相異点は多い。タカロアの例ではコートに舗石を有するものでもネッカーのように段状に高めるものではない。アフの構造もネッカーの場合にはタカロアのように板石を平積みして重ねることはしていない。またコート内の立石がタカロアではツアモツに共通する椅子状のものであり，また対をなすこともない。このように基本的構造と特徴とに懸隔があることが明らかであり，エモリーの述べるような強い関係があったとは想定でき

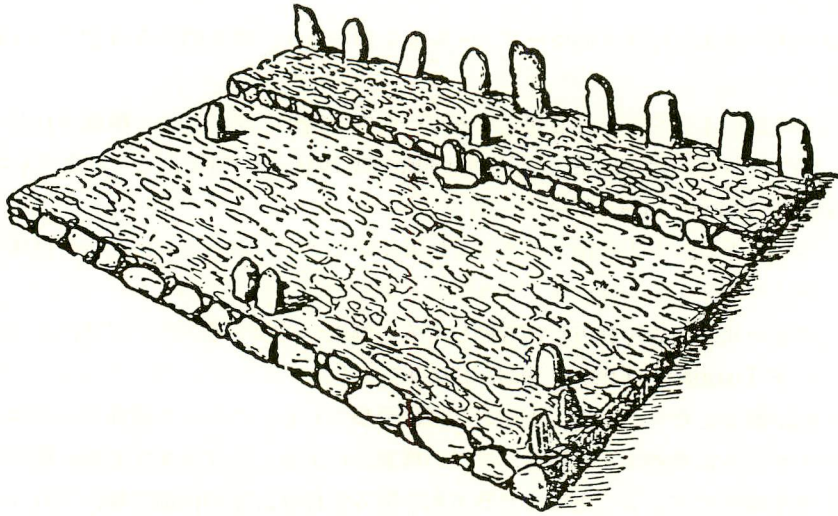


Fig. 7 Sketch illustrating typical Necker Island marae. (After Emory)

ない。

ランギハオアのマラエに付属する楕円形構造物の凹部はレアオにみられるマラエのウォールに付属する円形の構造物と共通する性格のものかとも考えられ、タカロアのマラエはツアモツ群島内のマラエとより関連性をもつものであって、ツアモツおよびソサエティの外部との関係を積極的に示すものはない。

タカロア島内部での3種のマラエの編年については西ツアモツおよびソサエティ諸島におけるマラエが参考となる。マラエからは絶対年代の手がかりとなる資料は得られていないため、形式的に検討せざるをえない。四周をウォールで囲んだ、きわめて整えられた型式の第3類は最も新しいタイプのものである。第3類のタイプのマラエについては以前に触れたことがある(新田 1981, pp. 92-94)が、ガランジェはタヒチの内陸タイプやタウティラ峡谷にあるマラエ(Garanger, 1964)との類似をランギロアの例から述べている(Garanger 1966, p. 65)。内陸タイプのマラエの年代については18世紀初頭以降といわれており、ソサエティ、西ツアモツ内部での相互関係から考えて、タカロアにおいても18世紀初頭以降の年代が与えられよう。それに対して、第1類、第2類の年代を想定するにはまったく手がかりがない。レアオのプカマルにあるマラエ(Nitta's No. 29)の下層から得られた木炭によるC14年代測定値 A. D. 1080±80より、11世紀前後という目安はあるものの、この種のマラエはごく普遍的に存在しており、今回の調査では年代決定は不可能である。

タカロアにおけるマイテについては現時点ではいまだ知るところが極めて少ない。したがって述べ得ることは多くないが、今後の問題点について記しておく。

踏査しえた僅かの例だけから言えば、タカロアのマイテには二・三の特徴がある。立地は島の平坦な砂地を選んでおり、そのため必然的に礁湖にやや近い中央部となる。この点はタカロアのタロ栽培が環礁におけるピット・カルティヴェイション・システムであることから、他の環礁の場合と同様である。構造的には石を積んで壁面肩部を補強することがある点に特

色がある。ただ、この場合も掘込の深いものにそれがあり、すべてのマイテが石垣で補強されるわけではない。マイテの方向性には一貫性はなく、種々の方向を向いており、また屈曲して連続するものもあって一見統一性が乏しい。この特徴は隣のタカポトのマイテ (Chazine 1977, Fig. 5) と共通するところである。他方、レアオのマイテ (Chazine 1982, Fig. 3, Fig. 5) とは異なる点である。

タロ栽培が環礁における生存において、いかに重要な意義をもったかについてはすでに述べた (新田 1983) とおりである。私の調査した狭い地域内ですら3ヵ所にマイテが掘られ、タロ栽培が行なわれていたのであり、タカロア全島には数十か所にのぼるタロ栽培址が存在することが想像できる<sup>4)</sup>。タカロアでもやはりタロ栽培が往時の島民の生存を支える重要な基盤であったことは十分に考えられるところである。タカロアには大形船の通過可能な深いパスがあるため、レアオなどの閉鎖環礁とは生態的にちがいがあがる。したがって海洋適応の面での差はあるが、タロ栽培の重要性は無視できないであろう。調理場址から発見された食料残滓をみれば大量の魚骨があり、ブタ下顎骨の発見とも合せて、タカロアの先史島民の生活は海洋資源とタロ栽培とを基盤として、若干の家畜を飼養する、ツアモツの環礁一般のものであったことがわかる。

タカロア島の考古学上の課題はより多くの調査によって既述した農耕の全体像を把握し、全島的な先史社会の実態を解明することである。

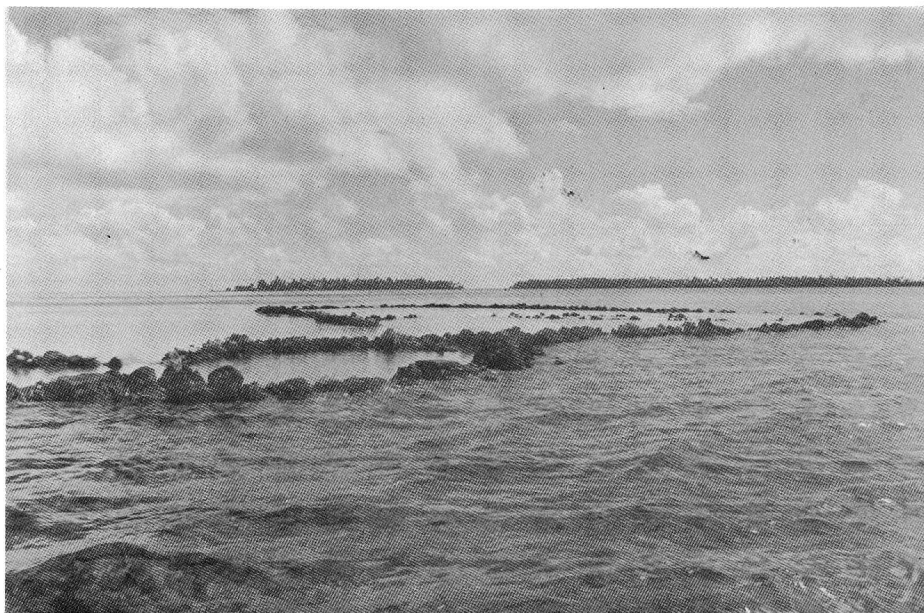
## 注

- 1) エモリーの略測図によるとコート内の小プラットフォームの位置のずれのほか、付属する小プラットフォームの位置も不正確である。また主アフ左右の舗石は記されていない。
- 2) 胴部に穿孔された大形巻貝はポリネシアでは穴を吹いて音を出す楽器として使われた。マティティマルでも同様であった可能性がある。
- 3) レアオでもマラエの主アフの背後に箱式棺墓が築かれている例がある。棺内からは人骨、遺物ともに全く検出されないで、後世の攪乱・盗掘のほか、二次葬の可能性も否定できない。
- 4) シャジーヌ氏によるタカポト島の調査においてもタロ栽培址は全島的に分布していることが確認されている。

## 文 献

- 新田栄治 1981 レアオ島のマラエ, 「鹿児島大学南海研紀要」2-1, 75-121頁。  
 新田栄治 1983 先史レアオ島の居住と自給自足形態, 「鹿児島大学南海研紀要」3-2, 174-210頁。  
 Chazine, Jean-Michel 1977 Prospections archéologiques à Takapoto. "Journal de

- la Société des Océanistes" t. XXIII, pp. 191-215.
- Chazine, Jean-Michel 1982 Archaeological Research (Preliminary). Sachiko Hatanaka and Norio Shibata (eds.) "Reao Report : A Study of the Migration to the Eastern Tuamotus", pp. 267-347, Kanazawa.
- Emory, Kenneth P. 1928 Archaeology of Nihoa and Necker Island. "B. P. Bishop Museum Bulletin" 53.
- Emory, Kenneth P. 1934 Tuamotuan Stone Structures. "B. P. Bishop Museum Bulletin" 118.
- Emory, Kenneth P. 1970 A Re-examination of East-Polynesian Marae : Many Marae Later, R. C. Green and M. Kelly (eds.) "Studies in Oceanic Culture History" Vol.1, Pacific Anthropological Records No. 11, pp. 73-92.
- Garanger, José 1964 Recherches archéologiques dans le district de Tautira, Tahiti, Polynésie Française. "Journal de la Société des Océanistes" t. XX, pp. 5-21
- Garanger, José 1966 Recherches archéologiques à Rangiroa. "Journal de la Société des Océanistes", t, XXII, pp. 25-65



a. Fish Weir, Pakite



b. Marae Ragihaoa





a. Ahu and Court



b. Front and Box of Ahu



a. General View



b. Front of Ahu



a. Marae Matatipoki



b. Marae Taearohia